

く炊いた飯を供え、祖先同様に心に念じて冥福を祈っている。

マア生還できたのもロシア語の勉強が一大勝因の一つかなあ、と。

勝者と敗者

熊本県 入江 司

昭和二十(一九四五)年八月十五日終戦、ハルピンで武装解除され、だまされた挙句の果てシベリアに抑留されるまでの間、初めて経験する敗者の惨めさをいやという程味わされた。その中で、横道河子から梅林までの行軍中特に忘れられないのが二つある。

その一つは……我々がまだ日本に帰れると思いつながら黙々と行軍している途中で、多分開拓団から命からがら逃げて来たと思われる婦人が、髪を短く切り、顔はすすけて黒く汚れ、疲れきった小さな子供を両手に握り、我々の隊列をじっと見つめていた姿が今でも心の奥に強く残っている。

時々、中国残留婦女子の記事や写真が新聞・テレビで出る度に胸の詰まる思いである。

もう一つは……横道河子から梅林までの行軍の

最後の日のことである。

朝、行軍開始してまもなく、どうも腹の具合がおかしく、時たま腹はぐるぐると鳴り、嫌な予感がしたが、ひたすら皆に遅れないよう黙々と歩き続けた。

行軍している道の両側には、ソ連の第一線の戦闘部隊と思われる精悍な兵士がうようよして、我々の隊列に獲物を狙う禿鷹のように目を光らせて見ている。しかし、我々は集団という形で狂暴なソ連兵から自衛の姿をとり、またハルピンから行動を共にしているソ連の警戒兵も、我々の逃亡の警戒と、ソ連兵の暴力、略奪を防ぐため警護の任も兼ねているようなので、一応は大丈夫のようだが、隊列を離れば責任は負わないとのこと！遅れるとダワイ・ダワイとマンドリン銃片手に急ぎたてていた。

腹の具合は一向に良くならず、おまけにお尻の方が段々と近くなっていくので気が気でない。びっしり詰め込んだ背囊が一段と重く感じられ生汗

らしいものが滲んで来た。それでも隊列から離れれば、周囲はソ連兵ばかり、どうなるか分からない。次の休憩まで何とか我慢しようと頑張るが次第に我慢も限界に来た。ちょうどその時、神の助けとでも言おうか「休憩」で隊列が止まった。

もう周囲がどうあろうと眼中になかった。小走りでも十メートル位先の草むらに走り込み用を済ませた。

やれやれ！ ほっとした気持ちで隊列に向かつて急ぎ戻ろうと草むらから出た途端、目の前にソ連兵がマンドリンの銃口を自分に向けて立っているのには、びっくり！ 何やら言っているが言葉は分からない。一方の手で背中の背囊を指しているのを見ると、どうやら背囊を渡せと言っているようだ。万事休す！

ハルピンから背負って来た背囊の中には、毛糸の襦袢類の他、戦友と分担して持った軍足に詰めた米等がぎっしり入れている。困ったと思ったがどう仕様もない。かと言ってハイどうぞ！ と渡

す気は毛頭ない。何秒か睨み合いが続いた。と、その時、横から別のソ連兵が現れ、先のソ連兵の銃口を横に向けさせ何か言っていたが、やがて声が大きくなり、今度はお互いが銃口を向け合い今にも撃ち合いをせんばかりの殺気立った喧嘩になった。どうやら背囊を略奪しようとしたソ連兵に対し、後から出て来たソ連兵は、それを止めたため喧嘩になったようだ。

そこで、これ幸いとばかり喧嘩の間合いを見計らって急ぎ隊列に向かって三々四々メートル走った。運が悪いときはどこまでついてないのか、また別のソ連兵が横から飛び出してきた。今度は行く手を遮ったと思ったら、さつさと後に廻りナイフで背囊をすばつと背中から切り離し、あつと言う間に持ち去ってしまった。本当に数秒のでき事で、大事な背囊はソ連兵に略奪されてしまった。

戦争に負けた者の惨めさ！ おまけに腹の調子までお粗末で、踏んだり蹴つたりの態であった。

隊列に戻ったら戦友が心配して力づけてくれ、

腹の調子が本調子でないにも拘わらず、重かった背囊がないことも幸いして、落伍することなく梅林收容所に辿り着くことができた。

戦争の勝者として、公然と略奪が行われていた環境の中で、良識ある行動をとるソ連兵士がいたことは、せめてもの救いであった。

今でも心に残っている。